魔法少女リリカルなのは～銀拳の魔導師～

ノープラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～銀拳の魔導師～

【Ｎコード】
Ｎ０３９８Ｏ

【作者名】
ノープラン

【あらすじ】
少年が、逃亡の果てに辿り着いたのは『海鳴』という街。少年はそこで一人の魔法少女と出会う。出会いと別れ、日常と闘いの中で少年は少しづつ成長していく。

第1話

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

随分と呼吸が荒い。まるで犬が舌を垂らして息をしているみたいだと、その男は思った。
男といってもまだ若い。年の頃は１３か１４。青年というにはまだ早く、
少年と呼ぶには若干遅い。しかし、背丈がその年頃の平均身長より劣る彼は、
やはり少年と呼ぶほうが相応しいだろう。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

彼が飲まず食わずで走り続けてすでに3時間以上になる
唇は乾ききって所々にひび割れができ、水分を取っていないせいか、
発汗も少年の運動量に対して圧倒的に少なくなってきている。
人間が汗を掻くのは、運動によって生じた熱を下げるためだ。
よって発汗量の少ない少年の体内温度は著しく上昇しており、
その熱がまた彼の身体を容赦なく蝕んでいる。
加えて走り続けたことによる筋肉疲労が彼を襲う。
脚は言うに及ばず、腕や背中、首に至るまで、彼の筋肉は悲鳴を上げていた。

そして極め付きは全身に付いた傷である。
それは切り傷のようで、彼の身体のいたるところに、
細く赤い線が描かれている。
その理由は彼が今現在走っている場所にある。
３６０度どこを見渡しても、木、木、木。

少年は名もなき山の中を疾走していた。
もちろん、登山道などではない。完璧なるケモノミチ。
普段は温厚で無口な、人間に伐採され蹂躙されるだけの樹木達が、
その枝を刃に変え、少年に容赦なく襲い掛かる。
そして少年の傷はさらに増えていく。

だが樹木達のささやかな人間への復讐は、少年の脚を止めるに足りえなかった。
すでに身体は満身創痍。体の内も外も。

だが一箇所だけ、他とは違う部位があった。
それは『眼』だ。その眼だけはボロボロの肉体の中で
一際異彩を放っていた。

それは清流の如く澄み切っているようでもあり、
それは烈火の如く燃え滾っているようでもあり、
それは閃光の如く冴え渡っているようでもあり、

とにかく一つだけ言えることは、
＜その眼が前を向いている＞ということのみ。

そして少年の眼が何かを捉えた。
光だ。太陽？いや違う。月？それも違う。
太陽の生命力溢れた活力の光ではない。
月の静謐に満ちた癒しの光でもない。

それは意思の光。
闇を恐れ、全てを照らしたいと考えた、ある意味傲慢で、
しかし優しき光。人の手が生み出した人工の明かり。

人々が暮らす街の光だ。

不意に少年の周りの木々が消失し、一瞬の後、少年は山を抜けたと知覚する。
後ろを振り返る。誰もいない。あるのは物言わぬ樹木のみ。

「……」

再び街の方向へ目を向ける。
そして天を見上げる。
綺麗な星空がそこにある。

「俺は…」

少年の体が震える。
寒いのだろうか。いや、そうではない。
これは歓喜の震え。

「俺は……」

そして少年は息を大きく吸い込み…。

「俺は……、自由だあぁぁぁぁーーーーーーーー！！」

咆哮した。
世界に。空に。大地に。そして自分自身に。

――銀拳の魔導師の物語が今、幕を開ける――

第1話（後書き）

やっちまった。

リリなのの二次創作を読んでたら、
自分も書きたくなって、つい投稿してしまいました。

小説を書くのは初めてですが、頑張って完結までもっていけるよう
頑張りますので、生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

第2話

槙原愛【まきはら　あい】は困惑していた。
それもその筈、なにせ自分の病院の玄関の前に人が倒れているのだ。
見た目は中学生くらいだろうか。まだあどけない顔立ちをしている。
その少年は体中が傷だらけで、来ている服――白いTシャツと黒のジーンズも
所々が破けている。傷はそう酷いものではない。切り傷、木の枝にでも
引っ掛けたのであろうと推測する。
まがりなりにも自分は医者だ。そのぐらいは解る。
もっとも、動物専門の医者だが。
槙原動物病院。彼女はそこの院長だった。

結局、愛はその行き倒れ？の少年を自分の病院の中に運んだ。
救急車を呼ぼうかとも考えたが、傷自体はそう酷いものではなかったし、
自分で手当てしたほうが早いと考えたのだ。

動物専門とは言っても、大学時代に簡単な対人医療の講義を受講していた愛は、
彼に治療を施した。といっても、傷口を消毒し、包帯を巻いただけであったが。
一応服も着替えさせた。もちろん、人間用の患者服は置いていないため、
自分の黄色いTシャツと白いジャージのズボンを使用した。
仕事柄、病院に泊り込むことがあるので、そのあたりの物は一通り

揃っている。
少年が少し小柄だったためかサイズのほうは女性用の物で問題は無かった。

その少年は今、愛が泊り込むときに使っている簡易ベッドに寝かせてある。
整った顔立ちをした少年の寝顔は苦悶の表情を浮かべていた。
傷が痛むのだろうかとも思ったが、どうやら違うようで、
悪夢にうなされているようだった。

普通に学校に通っていそうな少年が、なぜあそこまでボロボロになり、
疲弊していたのか気になった愛であったが、今それを考えても詮無きことだと思い、
タオルで少年の額に流れている寝汗をぬぐった。

手当てをしてから1時間ほど経った頃、愛は時計の針が正午を差しているのに気付いた。
空腹感を感じた愛は、そろそろ昼食にしようと思い、持参してきた弁当を取り出す。
可愛らしいピンクの弁当箱。今日のおかずは何だろうと期待に胸を膨らませ、
弁当箱に手を伸ばす。これは愛が自分で作ったものではない。
彼女が暮らす寮の管理人が作ったものだ。彼の料理の腕は誰もが認めるところである。
と同時に自分の料理の腕が壊滅的だということも、誰もが認めるところである。
そんなことを考えて少し落ち込む。男は仕事、女は家事、などとい

った、
古い考えに固執する人間ではないが、それでも好いた男性に手料理一つまともに
振舞えない自分の料理オンチが恨めしくもあるが、彼はそんな自分が好きだと
言ってくれた。あの時は胸が一杯になったのを覚えている。
そんな少し昔の思い出に浸りながら弁当箱の蓋を開ける。
開けた瞬間、食欲をそそる香ばしい匂いが鼻腔の奥をくすぐり……。

「その肉は俺のだ！クソババァーーーー！！」

餓えた野獣の如き咆哮が、鼓膜を震わせた。

愛は少年のあまりの大声に思わず弁当箱の蓋を床に落としてしまった。
一瞬呆けた愛だったが、すぐさまベッドから体を起こした少年に顔を向ける。
しかし少年は愛のほうに顔を向けてはいなかった。
何も無い壁、いや、虚空に目を向けている。
自分が「クソババァ」と呼ばれたと思い、若干の苛立ちを募らせていた愛だが、
すぐさま自分のことではないことを悟る。
当然だ。もはや少女とは呼ばれないにしても「クソババァ」と言われるほどの年齢ではない。

おそらく、彼の夢（悪夢）の中に出てきた人物に対しての言葉だろう。
それにしても、少年の肉を奪う「クソババァ」なる人物とは如何様な人なのだろうか。
あれやこれやと想像していた愛だったが、「はっ！」と我に返り、目の前の少年に声をかける。

「あ、あのぅ……」

自分が思っていたよりも大分小さな声量に違和感を覚える。
それは目の前で「クソババァ」なる人物に怒っている少年に対する恐れか、
それとも遠慮なのか愛には解らなかったが。
そして当然の如く少年は、愛の声など聞こえなかったとばかりに、

「あんのクソババァ！ふざけやがって！！」

などと、未だに夢の中の人物罵倒を繰り返している。
このままだと延々続けそうだったので、今度は少し腹に力を込めて、

「あ、あのっ！」

と、先ほどより大きな声で少年に呼びかける。
すると少年の動きが止まり、ゆっくりと愛のほうに顔を向ける。
愛はもう一度少年に声をかけた。

「あのぅ。だ、大丈夫？」

少年は愛を見て少し首を傾げると、

「アンタ、誰だ？」

心底不思議そうに問い返してきた。

「私は槙原愛。ここの――槙原動物病院の院長よ。あなたは？」

愛は少年に答えを返す。

「俺は――、鉄銀二【くろがね　ぎんじ】だ」

「くろがね……、ぎんじ……」

愛が少年――銀二の名前を呟く。

鉄と銀、随分と硬そうな名前だと愛は思った。

名は体を表すというが、彼の容姿もそれに違ったものではなかった。

黒色の短髪は硬質を持って尖っており、意思の強さが見える彼の瞳は、

銀のナイフを連想させるかのように鋭いものがあった。

しかしその瞳は、金属の冷たさだけを内包しているわけではなく、

確固たる信念の炎を宿しているようでもある。

「ええと…、銀二君？でいいのかな？」

「ああ……」

愛の質問に銀二が答える。

銀二は愛を警戒しているのか、その声は硬い。

「じゃあ、銀二君。一つ聞きたいことがあるんだけど、

君はどうしてあんなところで倒れていたの？」

「あんなところ？倒れていた？俺が……？」

わずかに首を傾げ、考える素振りをみせる銀二。
なぜ自分がこんな状況になっているのか理解できないといった表情。
気絶したことによる一時的な記憶障害だろうか、と愛は考えた。

「君は、うちの病院の玄関の前で倒れていたのよ。覚えてない？」

愛が銀二に簡単な説明をする。

「体中に引っかき傷みたいなものをこしらえて倒れていたから、
私がこの中に運んで簡単な手当てをしたの。」

愛にそう説明された銀二だが、一向になぜ自分があんな状況になったか
思い出せない様子。
これはもしかして、と愛は思った。

――記憶喪失――

そんな考えが愛の頭の中をよぎる。
まさかとは思った愛だったが、意を決して銀二に尋ねる。

「ええと…、銀二君。自分の住んでた所とかわかるかな？」

愛の質問に一瞬、動きを止める。
そして愛のほうを向いて一言、

「……地獄だ」

と言った。
愛は「へっ？」と間の抜けた声を出した。
そしてその言葉の意味を考えるようとした……、

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

が、本日二度目の絶叫により思考の中断を余儀なくされる。

「俺は……、生きてる……。生きてるぞ！ヒャッホーー！！」

突如、目の前で狂喜乱舞する銀二を呆気にとられた表情で
見つめる愛。

「やっと、やっとあの地獄から開放されたぜ！
俺は自由だ！！ああ、自由って素晴らしいなコンチクショー！！
ビバ、フリーダム！なあっ、アンタもそう思うだろ？」

突然、話を振られて驚いた愛は戸惑いながらも、

「え？ええ……、そうね……」

一応同意の言葉を返す。
自由はまあ、素晴らしいものだろう。
少なくとも不自由よりはずっといいはずだ。
などと、一般人として極普通なことを考える。

「だろ？やっぱりアンタもそう思うよな！
やっぱ人間、自由じゃないとな！くぅぅ、生きてて良かった！！」

銀二が今までどのような生活をしてきたのか、
愛には想像も付かないことではあったが、この少年が
これほどまでに自由を喜んでいるということは、
少なくともまともな生活ではなかったのだろうと、
愛は勝手に推測する。
そこまで考えたところで愛は彼が記憶喪失ではなかったのだと
思い至った。
自分が住んでいたところを覚えているのだ。
記憶喪失ではないだろう。
そのことに安堵した愛は、彼にもう一度先ほどの質問をしてみる。

「それで、銀二君はどうしてあんなところに倒れていたのかな？」

まだ『自由』という言葉を噛締め、感動していた銀二はその質問に
対し、

「うおおお！ハラ減ったーーー！！」

と、実に人間の本能に忠実な答えを返してきた。

「……」

自分の質問に対して、まったく関係ない答えを返してきた銀二に、
愛は若干頬をヒクヒクさせながらも、「まあ、人間だもの、
お腹は空くわよね」と寛大な大人の心を発揮して、
自分の机にあった弁当箱を差し出す。

「これ、私のだけど、良かったら食べる？」
愛から差し出された弁当に銀二の目は釘付けになる。
口からは若干の涎が垂れており、彼がいかに空腹なのかを如実に物語る。

「い、いいのか？」

一応、遠慮という概念は持ち合わせているようだと愛は思ったが、銀二に失礼だと思い、心の中で謝罪する。

「ええ、遠慮せずに食べていいわよ」

そう言った後の銀二の行動は早かった。
目にも留まらぬ速さで、愛の手から弁当箱と箸をひったくり、神速の如き箸さばきであっという間に弁当を平らげた。
３０秒もかかっていない筈だ。

「ゲフっ。ごちそうさん」

そう言って銀二はベッドに胡坐をかいた。
満足した笑みを浮かべてお腹をポンポンと叩いている。
自分の昼食が抜きになったのは痛かったが、
目の前で幸せそうな顔をしている銀二を見ていると、
それも瑣末なことだと思った。

「それで銀二君……、銀二君？」

愛が銀二に今度こそ「なぜ倒れていたのか？」を聞こうとした。
しかし銀二はすでにベッドに仰向けになり、いびきをかいていた。

「いつの間に！」と思った愛だったが、目の前で安らかな寝顔を見せる銀二に怒る気は一気にうせた。

「まったく……、本当に変わった子ね。」

愛が住んでいる寮の住人もかなり変わっているが、
この少年はまた違った方向で変わっていると思った。
それがどの方向なのか愛にはうまく説明は出来なかったが、
少なくとも彼が悪い人間ではないということは解る。
その根拠は説明できないが、女の勘というやつだろう。
そんな事を考えていると玄関のドアベルが鳴る音が聞こえた。

「すいませーん！」

女の子の声だ。
愛は玄関に向かって移動する。
そこには3人の可愛らしい少女達がいた。

「あら、どうしたの？」

愛がそう問いかけると、髪の毛を頭の両側でおさげにした少女が手に持っていたもの見せる。

「この子、怪我してるみたいで……」

そう言った少女の手の中を見てみるとそこには、

――首に赤い宝石をつけたフェレットのような生き物がいた――

第2話（後書き）

いきなり高町家の玄関前に行き倒れさせようかと思ったのですが、気付いたら槙原動物病院になってました。

とらは2をやったのが随分前なので、愛の性格とか若干うろ覚えです。

第3話

銀二が目を覚ますと、辺りはすでに夜だった。
覚醒しきっていない頭で周りを見渡す。
幸い月明かりのお陰で、何があるのかは把握できた。
自分の寝ている簡易ベッドと、その横にある机。
部屋自体は無機質だったが、部屋の隅に置かれている
観葉植物がそれを幾分か和らげている。

段々と頭のほうが覚醒してきた銀二は、ここがどこか考える。
脳裏に浮かんできたのは、一人の女性――確か『槙原愛』とかいったか。
彼女が確か言っていた。ここは動物病院で、自分はここの院長だと。
そして怪我をして倒れていた銀二を中に運んで手当てをしてくれたらしい。

そのあたりまでは覚えているのだが、いかんせん記憶があやふやだ。
自分が生きていること、そして自由になれたことに対して、
やたらテンションが高くなっていたような気がする。
ああ、そうだ。そのあと彼女の弁当を貰って（強奪して）
腹一杯になったから眠ったのだということを銀二は思い出した。

冷静になって思い返してみると、もしかしなくても自分は
かなり傍若無人な振る舞いをしていたのではないか。
そういえば彼女――槙原がいくつか自分に対して質問していた。
自分はそれに対して名前しか答えていない気がする。
確か、「なぜ倒れていたのか？」ということも聞かれたはずだ。
その質問に対して答えた記憶はない。

そこで銀二はふと思う。
自分がなぜここにいるのかを。
そして思い出す。

「そうだ。俺は、逃げてきたんだ……」

あの地獄から。
あの『クソババァ』から。

そのことを考えて銀二の体は震えた。
地獄のような日常を思い出した恐怖と、
これからの自由に歓喜して。

だが、と銀二は考える。
これからどうしたものか。
自分は無一文。帰る家もない。
いや、あるにはあるが、あそこには戻りたくない。
戻ればきっとまた元の木阿弥だ。
それだけは避けなければ。

まずは金銭と宿の確保。
最低でも金を調達しなければ食料すらまともに手に入らない。
しかし金を得るための手段はどうする。
もっとも一般的な方法は働いて賃金を得ることだが、
自分のような子供を雇ってくれるようなところがあるだろうか。
新聞配達をしている子供はいるらしいが、それもしっかりとした
身元保証があってこそのもの。
身元不明の子供を雇おうなどという酔狂な人間はまずいないだろう。

そこまで考えて銀二は一旦思考を切った。

元来、頭を使うのは性に合わない。
まあ、なんとかなるだろうと、根拠もなく思う。
最悪、食料は自分で調達すればいいだけのこと。
宿も同じくだ。
もちろん犯罪を犯すという意味ではない。
人間のもっとも原始的な食料調達方法。
つまり、狩猟採集だ。

幸いこの街は海と山に囲まれている。
食料には事欠かないだろう。
銀二はそのあたりのサバイバル技術には自信があった。
それが『クソババァ』に教わったことだというのが癪だったが、
背に腹は変えられない。利用できるものは利用するのみだ。

およそ文明人とは程遠いライフスタイル計画を立てた銀二は、
槙原の姿が見えないことに気付く。

そういえばここは病院だったか。
ならばもう夜だし、自分の家に帰ったのかもしれないなと考えるのと同時に、
得体の知れない自分を残して帰宅するのは無用心だなと思う銀二。

ふと、机の上を見るとメモ用紙が一枚置かれていた。
電気スタンドのスイッチを入れ明かりをつけてそのメモを読む。

『今日は一旦家に戻ります。明日の朝にはまた来るので、大人しく寝ているように。お腹が空いたら冷蔵庫の中のものを好きに食べて下さい』

女性らしい、可愛らしい文字でそう書かれていた。

それを読んだ銀二は苦笑する。

「まったく……、とんだお人好しだな」

本当ならすぐにでもここを発つつもりだった。
万が一、彼女が警察に自分のことを通報すれば、
少し厄介なことになる。
身元不明の子供を放置しておくほど警察も甘くはないだろう。
すぐにでも身元が割れてしまい、家に帰される危険性がある。
それを防ぐために出て行く気だったのだが。

「せめて……、礼ぐらいは言わねーとな」

怪我をして倒れていた自分を介抱し、食事を、
あまつさえ一夜の宿さえ提供した人間に、
礼の一つも言わずに出て行くなど考えられない。
鉄銀二は以外にも律儀な人間であった。

「さて、とりあえずお言葉に甘えて冷蔵庫の中のものを……」

そう言って冷蔵庫を探そうとした時であった。
ガラスの割れる音と、壁の砕ける轟音が聞こえてきた。

第４話

ユーノ・スクライアは焦っていた。
目の前に現れた、大きな黒い物体に。

（ジュエルシードの……、思念体！？　僕を追いかけてきたのか！）

それはユーノが探し集めようとしていた物、ジュエルシードから
溢れ出した魔力で体を構成した、思念体と呼ばれるもの。

ユーノはジュエルシード探索の途中で一度それと対峙していた。
しかし不覚をとってしまい、重傷を負わされてしまったのだ。
怪我をしたユーノは、体力の消耗を抑えるため、
変身魔法で自分の身体を小動物に変え、
念話と呼ばれる魔導師間で連絡を取るための
魔法を広域に放ち、助けを乞うた。
そしてその念話受信した一人の少女によって、
ここ――槙原動物病院に連れてきてもらい、手当てを受けたのだ。

手当てを受けたユーノは小動物用のケージに入れられた。
咄嗟に変身魔法で自分の姿を小動物に変えたことが功を奏したのか、
怪我の程度は人間のときほど酷くはなく、今は小康状態で落ち着いている。
今日一晩ゆっくりと休めば、明日にはまたジュエルシードの探索が
可能になるだろう。

そう思っていたユーノだったが、予想外の事が起きた。
ジュエルシードの思念体が、あろうことか自分を追ってきたのだ。
人間のように高度な知性を持たない思念体であったが、

自分を獲物と定めたのであろうか。そうであるならば厄介である。
おそらく自分の魔力を辿ってきたのであろうが、そうであるならば
ここから逃げてもまた追ってくるだろう。
加えて手負いの身である。まずこの場から逃げることが可能だろう
か。
一瞬考えたユーノであったが、それが不可能であることを悟る。
次の瞬間、ユーノを視界に納めた思念体が彼に飛び掛る。

（でもっ！！）

不可能だからといって、それが目の前の現実に抗わない理由にはな
らない。
ユーノは傷を負った体に鞭を打って、思念体の攻撃をかわすために
外に飛び出す。
思念体が病院の壁を壊して侵入してくる際、その衝撃でケージの檻が
壊れたのが幸いした。

病院の庭に飛び出したユーノは着地の衝撃が傷に響き、苦悶の表情
を浮かべる。
病院のほうに目を向けると、思念体がゆっくりと体を起こし、こち
らに
紅く禍々しい瞳を向けてくるのが見えた。
次はどうするか。このまま思念体の攻撃をかわし続けるのにも限界
がある。
ユーノがそう思ったときであった。

「ふえぇぇぇっ！？」

ユーノの背後で声が聞こえた。
声はまだ年端もいかぬ少女のもの。

その声に反応したユーノが背後を振り返ると、
そこには一人の少女が立っていた。

年齢は９か１０といったところか、
可愛らしいリボンで髪を頭の両側面で結わえている。
随分と子供っぽい髪型だったが、それがまた少女の
可愛らしさを引き立てているようであった。
その少女の目は大きく、意思の強さを感じさせるものではあったが、
今は困惑の色に染まっている。

「え、え？　なにこれ？？　どうなってるの！？」

少女は現状を理解できておらず、あたふたしている。
目の前で病院の塀が瓦礫と化して、尚且つ中の病院の壁にも
大穴が開いているのだ。若干９歳の少女の反応としては
当然といえるだろう。
だが少女の目は今日の夕方に拾った小動物の姿を捉えた。

「あっ！　フェレットさん！！」

少女は小動物のことをフェレットと認識しているようだ。
小動物――ユーノも自分のことだと認識した。

「フェレットさん！　こっち！！」

少女が胸の前で両手を開き、ユーノを迎える用意を見せる。
ユーノもそれに答え、少女の下へ走る。

なぜここにこの少女が？とユーノは考えなかった。
実は先ほど、思念体が近くに来ていることを感じ取ったユーノは、

夕方と同じように念話で助けを求めていたのだ。
それも当然のこと。思念体がユーノの魔力を辿ってここまで来れたのなら、
逆にユーノが思念体の魔力を感知できないはずがない。

そして念話を受信できるということは、少なからず自分と同じ力があるということ。すなわち魔法の力が。
ユーノは何も知らない現地の人間を巻き込んでしまうことに幾許かの罪悪感を感じたが、他に手段がなかった。
ジュエルシードをそのままにしておけば、いずれ大変なことになってしまう
可能性が高い。
本来なら自分一人で集めなければいけないところだが、
今の自分では力が足りない。
自分が持っているアレを使おうにも今のユーノには圧倒的に
力が不足していた。

（もしかしたらこの娘なら……）

微かな期待を胸に秘めて、ユーノは少女の下に走る。
しかしここでもまたユーノの予想外のことが起きた。
思念体が少女の存在に気付き、視線を少女に向けたのだ。
「不味い！」とユーノが思った瞬間、思念体が少女に飛び掛った。

少女は目の前に迫り来る脅威に一瞬、頭が真っ白になった。
そして悟った。自分に向かってくるアレからは逃げられないと。
なぜなら足が一歩も動かないから。自分の足であるはずのそれは、
まるで腰から先の神経が消失してしまったように一切の感覚がなかった。
それは自分の体の一部ではないようで、要するに恐怖で足が竦んで

しまっていた。

思念体はもう顔前まで迫ってきている。
少女の頭の中に過ぎるのは、自分の両親、兄弟、親友達の顔。
少女はそれが走馬灯と呼ばれるものだとはまだ知らなかったが、
漠然と自分がここで終わってしまうのだ、ということは解った。

それでも少女はまだ死にたくはなかった。
二人の親友のように未だ自分の確固たる夢は持っていない。
なんの取り得もない自分の将来がどんなものになるのか、
それはまだ解らないが、それでも、自分の夢を見つけたい。
人に、自分に、胸を張って言える『夢』を。
そして少女はきつく目を瞑り、心の中で祈る。

――誰か……、助けて――

ユーノはあと一歩のところで少女に届かない。
思念体の巨体が、少女の小さく華奢な体を押しつぶす。
2人がそんな悲劇を予想した。

しかし現実はそんな悲劇を覆した。
少女へと一直線に迫っていた思念体の進路は、
凄まじい打撃音とともに直角に折れ曲がった。
そのまま思念体の体は病院の塀に叩きつけられ、
塀を瓦礫に変え、その中に埋もれた。

来るはずだった衝撃に体を強張らせ、目を瞑っていた少女が、
いつまで経ってもそれが来ないことを不思議に思い、
恐る恐る目を開ける。そこには……、

「…ったく。人様のディナータイムを邪魔しやがって。テメェ…、殴り殺される覚悟は出来てんだろうなぁ？」

――拳を銀色に輝かせた少年が立っていた――

第４話（後書き）

予想外に筆が（指が？）進んだのでもう一話投稿。

無印を見たのが結構昔だったので、かなりうろ覚えです。
こんな感じだったっけ？？

現在仕事のほうが忙しく、あまり更新頻度は高くないかもしれませんが、
もし楽しみにしててくれる人がいたら嬉しいです。

もともと仕事の忙しさを紛らわすために、気分転換で
書き始めたのに、仕事が忙しいからあまり更新できない……。

なんだこの矛盾！？

第5話

銀二が冷蔵庫の中身を取り出そうとしたその時、
隣の部屋―診察室のほうから轟音が響いてきた。

「な……、何だ！？」

銀二は冷蔵庫を開けようとする手を引っ込め、診察室へと足を向ける。
ドアを開けて部屋の中を見回してみると、そこらじゅうに散乱した医療器具やベッド。
そして巨大な大穴の開いた壁があった。

ダンプカーでも突っ込んできたのかと思った銀二であったが、
見たところそれらしいものの姿は見当たらない。
変わりに部屋の中にあるのは、黒くて巨大な毛玉のようなもの。

「何だありゃ？」

銀二が怪訝な表情を浮かべる。
愛が動物病院と言っていたから、あれも動物なのだろうか。
この部屋の惨状を見るに、あれが暴れた所為だろうかと銀二が考えいると、
その毛玉は紅い眼を外に向けた。
随分大きな目玉だと銀二は思った。

そして毛玉につられたように銀二も大穴の開いた壁の外側に目を向ける。
そこには、一人の少女の姿があった。

こんな夜遅くに一人で出歩いている少女に対して、無用心だなと銀二が
至極真っ当な感想を抱いていると、毛玉の雰囲気が変わった。
体を微かに震わせて、力を込めているように感じられる。

（こいつ、まさか……）

銀二は己の経験のなかで、毛玉のその動きがなんであるかをうすうすながら
感じ取っていた。
それは獣が狩猟を開始するときの合図。
己が渾身の力を込め、一撃にて獲物を葬りさろうとする準備。

銀二は思った。
あんなものに飛び掛られては、あの少女などひとたまりもあるまい。
見たところ、特に代わり映えのしない、極々ありきたりな普通の女の子。
毛玉が自分に対して、攻撃の姿勢をとっていることなど、微塵も気付いていない様子。
おそらく、あの毛玉が自分に飛び掛ってきて始めて、己に迫った危機に気付くのだろう。
そして為す術もなく、短い命を終わらせてしまうはずだ。

銀二がそう考えていた次の瞬間、毛玉が少女に向かって疾走する。
それは走るというより、もはや飛んだというべきか。
凄まじい速さで、みるみる少女との距離を縮めていく。

銀二に動く気はなかった。
なぜなら動く理由がなかった。

自分は見ず知らずの人間のために、我が身を呈して何かを為す、といった類の人間ではない。
自分のことで精一杯。他人を助ける余裕などどこにもない。
先ほどは愛に、行き倒れていたところを助けてもらったばかりではあるが、
その恩は彼女に対してきっちり返すつもりだ。
しかし目の前の少女に対しては何も借りはない。
それはすなわち、助けるための理由がないということ。
ゆえに、銀二に動く気は全くなかった。

だが、気付けば銀二の体は動いていた。
何故？　と考える暇もなかった。
すでに己の中にある異能の力は全身に行き渡っている。
それは銀二の身体を、およそ常人とは違う領域まで押し上げ……、
否、作り変えたといってもいい。
皮膚は鋼の如く硬化し、筋肉は太縄の如く引き締まり、
血管を流れる血液は清流から激流に、骨は一振りの刀の如く強くしなやかに。

銀二の体が毛玉に向かって疾駆する。
駆ける際、病院の硬い床が銀二の脚によって踏み砕かれる。

黒い毛玉は凄まじい速度で少女に肉薄する。
銀二はそんな毛玉を見て、「遅い」と思った。
すでに銀二の体は毛玉と併走している。
そして銀二は己が異能の力を左腕に込め、その拳で毛玉の側面を殴りつける。

銀二の拳と毛玉の体が衝突する際、凄まじい打撃音があたりに鳴り響く。
そしてそのまま毛玉は吹き飛ばされ病院の塀に叩きつけられた。
その余波で塀が崩れ、瓦礫が毛玉を覆い尽くす。

毛玉を殴りつけた後、ふと銀二が我に帰る。
少女を助けるつもりなどなかった。
自分はそんな高尚な人間ではない。
本当に動く気はなかった。本当だ。
だが、銀二の体は自分の意思とは関係なく動いてしまった。
心と体が全く別の動きをするという矛盾。
その矛盾を解消するために少年が導き出した答え……。

「…ったく。人様のディナータイムを邪魔しやがって。
テメェ…、殴り殺される覚悟は出来てんだろうなぁ？」

それは理由を作ること。
自分の体が動くに足る理由を。

だが銀二は気付いていなかった。
その理由もまた、己の本心でないことに。
心と体ではなく、心の中で生まれた新たな矛盾。
それに気付くには、まだ銀二の心は幼かった。

第6話

高町なのはは呆然としていた。
自分の目の前で起こった出来事に。
短い人生の中で、始めて体験した非日常。

突如、頭の中に聞こえてきた助けを求める声。
塀と壁が崩壊した動物病院。
そこから現れ、自分に襲い掛かってきた異形の怪物。
そして……、自分を助けてくれた、銀色に光る腕を持つ少年。

戸惑えばよいのか。
驚愕すればよいのか。
恐怖すればよいのか。
それとも、安堵すべきなのだろうか……。

なのはの頭の中では、今日一日で起きた様々な出来事と感情が、ごちゃ混ぜになっており、結果として、彼女の思考は一時停止することを選択した。

「ふぇ……？」

なのはの小さな口から言葉にならない声が漏れる。
しかしそれは、この状況を物語る上で、もっとも適切な言葉とも言える。
文字通り「言葉にならない」という状況。
若干9歳のなのはにとって、この状況を語れる語彙はまだなかった。
ただ、一つだけ解っていることがある。

それは……、自分がまだ生きているということ。
思考の一時停止を＜選択できる＞ということは、それ自体が、
己の存在証明に他ならない。

自分が生きていることを自覚したなのはが、
その思考を再生するのにさほど時間はかからなかった。
元来、同年代の少年少女たちよりも精神年齢が高く、
また頭の回転も速いなのはである。
おおまかにではあるが、自分の置かれた状況を認識する。

自分の頭の中に響いた、助けを求める声。
これが何であったのかは解らない。
だが今はひとまず置いておく。
解らないことにいつまでも思考を割くのは時間の無駄だ。

自分に襲い掛かってきた怪物。
じゃれ付いてきただけ、という可能性も皆無ではないが、
自分の勘がそれは断じて違うと告げている。
とにかくこの怪物。まったく解らない。
自分が今まで見たこともない生き物だ。
これも置いておく。少なくとも自分に害を為す生物だということ。

そして最後……。

銀色に光る腕を持つ少年。
自分に襲い掛かる怪物を素手で殴り飛ばした。
自分や少年より遥かに巨大で俊敏な怪物を、
それ以上の速さと力で殴り飛ばした。
彼がいなければ今頃私はどうなっていただろうかと、なのはは考える。

良くて大怪我、悪ければ死んでいただろう。それも潰れたトマトのように。
自分でその様を想像し、なのはの背筋が震えた。
そして少年のことを考える。
この少年は何者なのか。少なくとも只の人間ではないだろう。
当然だ。あんなことが只の人間に出来るものか。
それに腕が銀色に光る人間がそうそういる筈もない。
まあ、少年が何者かということも置いておこう、となのはは思った。
結局解らないことばかりだが、一つだけ解ったことがある。
それは……、少年が自分を助けてくれたということ。
少年が何故自分を助けてくれたのかは解らないが、結果として自分は助けらた。
当の少年—銀二が自分を助ける気など微塵もなかったとは、知る良しもなかったなのはであった。
そしてなのはは目の前の少年に声をかける。
「あ、あの……」
「ん？」
少年がなのはに視線を向ける。
「えっと……、助けてくれてありがとうございます……」
少年に感謝の言葉を伝える。
助けてもらったのだ。お礼を言うのは当然だろう。

「別に……、助けたわけじゃねーさ」
少年が気だるそうに答える。
「その……、なんだ……。人が晩飯食おうとしてた時にドンチャンと煩かったからな。
ムカついてぶっ飛ばしただけだ」
「そ、それでも助けてくれたのは本当ですから！　だから、ありがとうございます！！」
「そうかい。それじゃまぁ、ありがたく受けとっとくか」
「はい！！」
なのはが嬉しそうに言うと、少年はすこしばつが悪そうな顔で笑った。
しかし次の瞬間、突然険しい顔つきになり、視線をなのはからはずす。
つられてなのはもその視線の先を追う。
そこには砕けた塀の瓦礫を押しのけ、その巨体を現し始めた怪物がいた。
先ほどのダメージがまだ残っているのか、その動きは緩慢としたものだったが、
それから放たれる殺気は攻撃を受ける前とは比べ物ならないほどである。
喜びも束の間、一転してまた緊迫した状況に陥ったなのはは、
傍らに立つ少年を見上げる。

少年は若干苛立ちのこもった口調で、

「ちっ！体調が万全じゃなかったとはいえ、俺の『スーパーウルトラダイナマイト
シルバーアトミックパンチ』を受けてまだ動きやがるとはな……」

と言った。

「……え？」

なのはの体の力が抜ける。
少年の口調は至って真剣そのものだ。
ふざけている様子など微塵も感じられない。
しかし、あれだ。
その技名は如何がなものか。
今時、格闘ゲームでもそんな技の名前はないだろう。
いやいや、もしかした自分の聞き間違えかもしれないと、
そう思ったなのはは少年に尋ねる。

「あ、あの～。今、何て……？」

「あ？何って何がだ？？」

「えーと……、すーぱー何とかって……」

「ああ。『スーパーウルトラダイナマイトジェノサイドギガンテック
クマグナムパンチ』のことか？」

それがどうした？　みたいな顔で少年が答える。

「さっきと違う！？」
なのはが素早くつっこむ。
それに対して少年が、
「冗談だ。ちゃんと覚えてるに決まってるじゃねーか。
『ジェネシックスパイラルトルネードインパクト真空飛び膝二段蹴り』だろ？」
「パンチからキックに変わってる！？　絶対忘れてますよね！？」
「人間は忘れることで明日へと進める生き物なんだぜ？」
「忘れちゃいけないことってあると思います！」
なのはと少年の間で交わされる、ボケとツッコミの応酬。
端から見れば、仲の良い兄妹のじゃれあいに見えるかもしれない。
「少しは肩の力が抜けたか？」
不意に、少年がそう尋ねてくる。
「ふぇ？」
なのはがキョトンとした顔で僅かに首を傾げる。
「あの毛玉ヤローが動き出すまで、もう少し時間があるみてぇだったからな。
これから逃げるのに、ガチガチに固まってちゃあ、逃げられるもんも逃げられねぇからな。」

すると少年はわざとあんなことを言ったのか。
色々あったせいで、自分が思っている以上に体が緊張していたようだ。
そんな自分の緊張をほぐすため、少年はわざと軽口を叩いたらしい。
そういえば随分と気が楽になった気がする。

「どうなんだ？　まだ固まってるようなら脇腹くすぐってやろうか？」

少年が意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「だ、大丈夫です！　すっかり柔らかくなりました！！」

なのはは自分の脇腹を押さえて僅かに後ずさる。

「よし。じゃあ逃げるぞ。しっかり付いて来い」

「はい！」

少年の言葉になのはは威勢よく答える。
そして二人は同時に走り出す。
病院の敷地を出て、道路を駆けていく。

二人が逃げてしばらく後、怪物が動き出す。
まだ若干殴られた部分に痛みが残っているが、行動に支障はない。
黒き怒りをその身に込め、怪物は跳躍する。
自分の獲物を狩るために。
怪物の巨体が夜の闇の中へと消える。

怪物が二人を追っていった後、槙原動物病院の庭に、
一つの動く影があった。
小動物にその身を変えたユーノ・スクライアだった。

「あれ？」

ユーノの呟きが誰もいない虚空へ消える。

第6話（後書き）

不意にギャグを入れてみたくなった。

未だに話の方向性が見えてこない。

自分の文才のなさに凹みますね。

第7話

閑静な住宅街。
昼間であってもそれなりに静かなこの場所だが、
今はそれに輪をかけて静寂に包まれている。
ここら一帯が寝静まっているような静けさのなか、
靴が地面を打つ音だけが響いている。

一組の少年と少女が走っている。
鉄銀二と高町なのはだ。
二人は同じくらいの速さで走っているが、
表情のほうは対称的であった。

銀二のほうは汗一つかかず、まるでジョギングでもするように
軽快に足を動かしている。
対するなのはのほうは呼吸が荒く、額には大量の汗が流れている。
それでも足だけは懸命に動かし、銀二に離されないようにしている。

不意に銀二が足を動かすのを止めた。
なのはもそれにつられて足を止める。

「はぁっ、はぁっ……、ど、どうしたんですか？」

急に走るのを止めた銀二に対して、なのはが尋ねる。

「いや、少し休憩だ」

銀二はそう言ってなのはの状態を観察する。

（そろそろ限界か……）

目の前の少女の体はすでに満身創痍。
槙原動物病院からここまで、およそ5分といったところだろうか。
その間、この少女は全力疾走だったのだ。
元々運動もさほど得意なほうではなさそうで、
走り方にも随分と無駄が多かったような気がする。

銀二はそんなことを考えながらふと思う。
なぜ自分はこの少女を連れて逃げているのだろうと。
自分一人ならば、あの毛玉から逃げきることなど造作もなかったはずだ。
仮にその場の流れで一緒に逃げたとしても、途中で分かれるなり、スピードを上げて置いてきぼりにすればよかっただけではないのか。
『何故』という言葉が、銀二の頭の中で繰り返し繰り返し反響する。

「ちっ……、めんどくせぇ……」

結局、銀二は思考を放棄することにした。
わけのわからない靄のような感覚が体全体に沈殿したような感覚が残るが、
銀二はそれを無視することにした。

「ふぇっ、どうしたんですか？」

銀二の呟く声が聞こえたのだろう。

少女が銀二を心配そうに見上げる。
「あ？別に…、なんでもねーよ」
銀二がぶっきらぼうに応える。
「ぁ……、ご、ごめんなさい」
少女が心底申し訳なさそうに謝る。
それを見て銀二は何故だか苛立った。
目の前の少女に対してのものではなく、自分に対してだ。
「なんで謝るんだ？」
「え？」
気がつけば口が勝手に動いていた。
「なんでお前が謝る？　別にお前はなんも悪いことしてねぇだろうが」
「え…、でも……、助けてもらったし…、迷惑かけてるし……」
「迷惑？」
「はい……、わたし、運動音痴だから、足遅いし…、体力も……」
少女の声がどんどん小さくなっていく。
おそらく気付いているのだろう。
銀二が自分のペースに合わせて走ってくれていたことに。

小さい割に聡い子供だと銀二は思った。

「はぁ…、馬鹿かお前は」

「へ！？」

銀二の言葉に少女が驚いたような声を上げる。

「俺がお前を助けたのは、メシの時間を邪魔したあの毛玉ヤローにムカついたからだし、
一緒に逃げてるのも…、まぁ、なりゆきってやつだが…、それでも、俺がテメェ自身の
考えでやったことだ。だから…、その、何だ…。お前は悪くねぇんだから、謝るな」

そう言って銀二は少女の頭の上に手を乗せる。
自分より頭一つ分低い少女の頭は、手を乗せるには
丁度よい高さとはいえなかった。

「……」

頭に手を乗せられた少女は呆っとした表情をしながらも、
若干頬を桃色に染めていた。

「ん？どうした？？」

「ふぇ？　あっ！　いえ、な、なんでもありません！！
その……、ありがとうございます……」

銀二が言葉をかけると、少女は我に返った様子で、

少し慌てている。
その様子を見て銀二は、先ほど抱えていた靄のような感覚が、少し薄らいだような気がした。
「あの！　わたし、『なのは』っていいます。高町なのは」
突然少女―なのはが、自己紹介してきた。
「なのは？　変な名前だな」
「ふぇ！？　そ、そんな事言われたのは初めてです……」
「よかったじゃねーか。貴重な経験が出来て」
「そうでしょうか？　って違います！　その…、名前、教えてもらっていいですか？」
「俺の名前？　鉄銀二だ」
「くろがね…、ぎんじさん……」
銀二が自分の名前を告げると、なのははそれを反芻していた。
胸の前で手を組み、なにか大事な物でも胸にしまいこんでいるように見える。
しかし銀二は「大方、金属みたいな名前だと思ってんだろうな」と考えていた。

「さて、体のほうは少し休めたか？」

流石に、このままここでじっとしているわけにもいかないので、
銀二はなのはにそう尋ねた。

「あ、はい！　大分休めたのでもう大丈夫です！」

なのはが両腕を上げてくの字に曲げ、元気良く応える。
だが銀二にはそれがやせ我慢だと解っていた。
まだ表情には疲労の色が残っており、体の動きも若干鈍い。
銀二に迷惑をかけまいと、必死に取り繕ってはいるのだろうが、
銀二の目は誤魔化せなかった。

しかしこのままこの場所にとどまる訳にもいかないため、
先ほどよりペースを落として進むべきか銀二が考えていると、
頭上から強烈な気配を感じた。

「くっ！」

銀二は咄嗟に飛び出し、なのはの体を抱えて、その場から飛び退く。
なのはは突然銀二に抱えられたことで驚きの表情をしている。

銀二たちがその場を離れた直後、背後でアスファルトを砕く轟音が
鳴り響いた。

「ちっ！　意外と早かったな」

銀二はそう言うとなのはを放し、背後を振り返る。
そこには先ほどの黒い毛玉――ジュエルシードの思念体がいた。

「も、もう追いついてきたの！？」

そう言いながらなのはが銀二の服を掴む。
先ほど殺されかかったのを思い出したのだろうか、
声と手が震えている。

「は、早く逃げないと！」

そう言ってなのはが銀二の服を少し強く引っ張るが、
銀二は動こうとしない。

「ぎ、銀二さん？」

なのはがその場から動かない銀二の顔を見上げると、

「お前は逃げろ。俺はアイツの相手をする」

「え？」

なのはは銀二の言葉に困惑した。
いまこの人はなんて言ったのだろう。
あの怪物を相手するといったのか。
確かに銀二は強い。
なにせあの怪物を殴り飛ばしたのだ。
相手をすることは可能かもしれない。
しかし……、

「わたしも残ります！」
なのはがそう断言する。
銀二はその言葉に面食らった。
「なに言ってやがる！　邪魔だ！　とっとと失せろクソガキ！」
銀二はわざと辛辣な言葉をなのはに浴びせる。
これで逃げてくれればいいと、銀二は思った。
「嫌です！　銀二さんだけ置いてなんていけません！！」
銀二の言葉もなのはの強固な意志を破ることは出来なかった。
それどころか、ますます強くなっている気がした。
銀二はため息を吐きながら、
「……勝手にしろ。けど、そっから動くんじゃねぇぞ……」
「はい！」
銀二の諦めきった声に対して、明るく返事を返すなのは。
銀二は若干疲れた顔をしながらも目の前の異形と対峙する。
「さて、それじゃあ…。おい、そこの毛玉ヤロー。軽くブチ殺してやっからかかってこい」
銀二のその言葉が引き金になったのか、思念体が銀二に飛びかかる。
およそ5メートルの間合いは一瞬で詰められ、銀二に肉薄する。
だが、

「遅せぇ……」

銀二は体を捻り、思念体の側面へと裏拳を叩き込んだ。
なまじスピードのあった思念体は、側面からの急激な力によって、
その進行方向を強制的に変えられ、民家の塀に突っ込む。
塀を瓦礫に変えた思念体であったが、すぐさま体を起こし、
再び銀二へと突進する。

「バカの一つ覚えが！」

銀二も再び体を捻り、先ほどと同じように裏拳を繰り出す。
が、しかし、銀二の拳は空を切っただけであった。

「なに！？」

思念体は銀二の攻撃が来る直前、空中へと跳び上がったのだ。
そして空中へ跳んだ思念体から黒い触手のようなものが飛び出す。

「んな！？？」

それを見て銀二が驚いたのもつかの間、
触手は銀二の身体に巻きついた。
そして思念体はそのまま銀二に向かって空中から突進をかける。
当然、触手によって拘束された銀二に、それを避ける術も時間もなく、
思念体の巨体によって押し潰され、砕けたアスファルトの地面に埋没する。

第8話

「銀二さん！！」

なのはは目の前で起こった光景に目を覆いそうになった。
銀二があの怪物に押し潰されてしまったのだ。
銀二の攻撃をかわし、空中へ跳んだ怪物は、触手のようなものを出し、
銀二を拘束した。
そしてそのままその巨体でアスファルトの地面ごと押し潰したのだ。
あの怪物の下は今頃どうなっているのだろう。
そんな想像をしてしまいそうになったところで、慌てて首を横に振る。
まだ、死んではいないかもしれない。
すぐに病院に連れて行けばきっと助かる。
そう前向きに考えていたなのはであったが、目の前の怪物が、
自分のほうを見ていることに気付いた。
病院に連れて行く前に、まずこの状況を切り抜けなければ、
2人とも助からない。
そう思ったなのはであったが、自分1人ではあの怪物と闘うことはおろか、
逃げることすら間々ならないであろうことは嫌というほど解っていた。

闘うことも逃げることも出来ない。
ならどうすればいい。
このままここで大人しく殺されるのを待つのか。
そうだ。
それでいいのだ。

大人しく待っていればいい。
だってあの人はそう言っていたではないか。

――勝手にしろ。けど、そっから動くんじゃねぇぞ――

次の瞬間、怪物が再び空中へ跳び上がった。
違う。蹴り上げられたのだ。
砕けたアスファルトの地面から一本の脚が突き出されている。
そしてその脚を下ろし、今度は人の身体が起き上がるのが見える。
銀二が立ち上がり、身体についた土やアスファルトの欠片を掃う。

「銀二さん！」

なのはは安堵の表情を浮かべ、銀二に声をかける。
銀二はそれに対して、片手を挙げるだけの簡単な返事をして、
自分が蹴り上げた怪物を見上げる。

「ったく、随分とナメた真似してくれるじゃねぇか。
まさか、そんな芸が出来るなんてなぁ。びっくりしたぜ。
お礼に俺も少し本気で遊んでやるよ」

そう言うと、銀二の雰囲気が少し変わったのがなのには解った。
はっきりとは言えないが、銀二の中でナニかが轟いている。
銀二の外側には何ら変化は見られないが、内側ではまるで
見えない力が嵐のように吹き荒れている。

次の瞬間、地面が砕ける音と共に銀二の身体が凄まじい勢いで
空中に跳ね上がる。

一瞬で怪物と同じ高さまで昇った銀二は、両手を頭の上で組み、
そのまま怪物の頭上へと振り落とす。
凄まじい衝撃と共に、怪物が一直線に地面へと叩きつけられ、
再び地面を抉った。

少し遅れて銀二が地面へと着地するが、それと同時に怪物へ向かって突進する。
そのままの勢いで銀二は、怪物へ拳による突きを繰り出す。
未だ体勢を立て直していなかった怪物はそれによって吹き飛ばされ、
地面を転がっていく。
１０メートルほど転がったところで止まったが、流石にダメージが大きかったのか、
すぐには起きだそうとはしなかった。

「す、すごい……」

なのは呆然としていた。
まさか銀二がここまで強いとは思っていなかったからだ。
今の動きはもはや普通の人間の範疇ではない。
自分の父や兄も普通の人と比べれば大分強いほうだろうが、
二人と闘ったらどちらが強いのだろうか。
こんな状況であったが、なのははついそんなことを考えてしまう。

だが銀二の顔は険しかった。

（仕留めきれてない……。ダメージは蓄積してるはずだが、

クソ！　何だこの嫌な感覚は！！）

今まで数多くの生物と闘ってきた。
その中にはありえないほどの耐久力を持つ生物も
当然ながら存在した。
しかし、彼らも生物。高くても、無限ということはありえない。
繰り返し攻撃を加えればダメージは蓄積されていく。
要は根競べだ。互いに攻撃を出し続け、先に根を上げたほうが敗者
になる。
それはこの世の理。

しかし、目の前の生物にはそれが感じられない。
普段なら薄っすらと解るはずのアノ感覚。
相手にダメージが蓄積されていくのがわかる感覚。
目には見えずとも、膨大な経験から磨かれた、闘う者としての超感
覚だ。

その感覚に従えば、確かにダメージは蓄積されている。
いや、蓄積されすぎている。

先ほど銀二が加えた空中での一撃。
通常ならあれで既に、ラインを割っていたはずだ。
生と死の境界線というラインを。
しかし、あの攻撃がラインを割ることはなかった。
ギリギリのところで止まったのだ。
念のため、もう一度攻撃を加えてみたが、そのラインを割ることは
なかった。
だが一応肉体の損傷はしているようで、今は動けないようだった。
しかし、徐々にではあるが、回復しているのが解る。
もう少しすれば動き出すだろう。

銀二は苛立ちながらも、昔どこかで聞いた言葉を思い出していた。
「こいつはもしかして……、あのババァの言ってやがった――」

「そいつは、物理的な攻撃じゃ倒せません！」
銀二はその声を聞き、なのはの方へと振り返る。
あきらかになのはの声ではなかったのだが、
この場にいるのは銀二となのはの二人だけ。
声を発したのが自分ではないことは当然解っているので、
なのはの方を振り返ったのだ。

対するなのはの方も銀二を見ており、首を左右に振っている。
自分ではないというジェスチャーだろう。
だとすれば一体誰が、と銀二が思ったところで、

「あいつはジュエルシードの思念体。純粋な魔力の塊だから、
同じ魔力を直接ぶつけるしか完全に倒す方法はありません」

再び声がした。
今度は声の聞こえた方向を正確に把握し、そこに目を向ける。
なのはも銀二の目線を追う。
その目線の先にいたのは、

「あなた方には資質がある。僕と同じ魔法の資質が。
お願いします。力を貸してください。」

「イタチ？」
「フェレットさん？？」
銀二となのはの声が被った。

第8話（後書き）

次話あたりで、なのはが魔法少女になる・・・といいなぁ。

アニメ1話に何話かけてんだ！って話しですよね。
もうちょっとサクサク進めればいいのに・・・。
このままだと物凄く長くなってしまう。

少しスピードアップするかな・・・。

第9話

銀二となのはの二人は目の前の異様な光景に驚いていた。
怪物が襲ってくるということ自体、充分な異常ではあるのだが、
それとはまた異なった方向性の異常に、またもや驚愕させられる。

「お願いします！　あなた方の力を、僕に貸してください！」

声の質からいって少年のものだろう。
だが、その声が発せられている源が問題だった。

「あ、あのぅ～……、聞いてます？」

二人がなんら反応を見せないのを不安に思ったのか、
その声は、二人に尋ねてくる。

「イタチが喋った！？」
「フェレットさんが喋った！？」

ほぼ二人同時に思ったことを口に出した。
と、すぐに二人は顔を見合わせ、

「フェレット？」
「イタチ？」

互いに疑問文を交し合う。
お互いの、目の前の存在に対する認識が不満なのだろうか、
両名共に、若干眉を顰めている。

「いやいや、どうみてもイタチだろアレ」
「なに言ってるんですか。可愛いフェレットさんですよ」
「いいや、イタチだ。前に山で見たことがある。」
「わ、わたしだって……、て、テレビとかで見たことありますっ！」
「テレビ??　ハッ！　これだからゆとり世代は！　お前アレだろ？
カブトムシとかデパートでしか見たことなかったりするだろ？」
「か、カブトムシくらい、ちゃんと生で見たことあります！
ゆとり世代舐めないで下さい！」

話が脱線し、無意味な言葉の応酬が繰り広げられている。
厳密にいえば、フェレットはイタチ科に属する動物で、
別名『シロイタチ』とも呼ばれているので、あながち
どちらが間違っているとは言えないのだが、
自分の目の前で繰り広げられている不毛な争いに終止符を打つため、
フェレット（便宜上こちらを仮採用）は少し声を張り上げ、
「ふ、二人ともストーップ！　とにかく落ち着いてください！」
フェレットの声に気がついた二人は再びそちらに顔を向ける。
「あ〜、もうメンドクセェ。つうかアイツに直接聞けばいいんじゃ

ね？」

「そうですね。それで万事解決です」

そして二人はフェレットに「結局どっちなんだ（なの）？」と聞いてくる。

色々と言葉では言い表せないようなプレッシャーが、二人から放たれており、

フェレットは一瞬言葉に窮したようだったが、やがておずおずと、

「え、え～と……、じゃあ…、ふぇ、フェレットで……」

フェレット（正式採用）が答えた瞬間、銀二の顔がさらに険しくなり、

逆になのはの顔は花が咲いたかのように華やかな笑顔になった。

「くそっ！」

「わ～い！　やっぱりフェレットさんだ～」

なのはが銀二に対して誇らしげに胸を張る。

銀二はとても悔しそうだった。

フェレットからすれば別にどちらでもよかったのだが、

なぜ『フェレット』のほうを選んだのかと問われれば、

まあ、理由は聞かずもがな、といったところか。

少女の喜ぶ顔が見れたので、自分の答えは正解と捉えてよいだろう、

とフェレットは思った。

そんなことをフェレットが考えていると、なにか大事な事を忘れていることに気付く。

「あっ！　違う違う！　そうじゃなくて！！」
どうやら大事なことを思い出したようだ。
フェレットが慌てて二人に向かって声を出す。
「二人とも、僕の話を聞いてください！」
落ち込んでいる銀二と、喜色満面ななのははフェレットの言葉に、顔を向ける。
どうやら、今度はまともに話を聞いてくれそうだと、フェレットは思った。
ようやく本題に入れることに若干の安堵を覚えたフェレットであった。

「え～っと…、つまり――」
「俺達に協力しろってことか？」
「あ、はい……。そうしていただけると、もの凄く助かります……」
フェレットの話を要約すると、
自分は異世界の住人で、そこで発掘を生業としていた。

そしてそこで発掘した『ジュエルシード』なるものが、運搬中に、
不慮の事故でこの世界のこの街に散らばってしまった。
とても危険な代物なので、早く回収しないと不味い。
しかし最初は自分一人で回収しようと試みたものの、
予想以上に難航し、一人では手に負えなくなったため、
自分と同じ『魔法』の力を持つ現地の住人に助けを求めた。
そこで現れたのが、フェレットの声を聞いたなのはと、
偶然居合わせた銀二であった。というわけらしい。

「ほえ～……」

「……」

なのははいきなり出てきた『異世界』だの『魔法』だのといった言葉に
呆然としており、銀二のほうはなにか思うところがあるのか、黙っている。

「見たところお二人とも魔法の資質があるようですし……、特にそちらの……」

そういってフェレットは銀二のほうを見上げる。

「あなたが先ほどから使っていたのは……『身体強化』の魔法ですよね？
しかもかなり高度な……」

「別に……、んな大層なモンじゃねーよ」

「え、え！？」

フェレットが言った言葉に対してなのはが驚きの声を上げる。
「銀二さんって、魔法使いだったの！？」
「ん？　まぁ、魔法を使えるやつのことを魔法使いってんなら、俺は……、魔法使いってことになんのか？」
「ええ、まあ。僕らの間では魔導師というのが一般的なんですが、そちらの方―銀二さんと仰られる方が使用していたのは、まぎれもなく魔法です。
『身体強化』という初歩的なものですが、それでも、あそこまでのものは中々お目にかかれるものじゃありません」
フェレットが銀二の魔法を褒めている。
銀二としてはフェレットなんぞに褒められても、嬉しくもなんともないわけだが、それでもなのはは嬉々とした表情で、
銀二を見上げている。
「すごいすご～い！　わたし、魔法使いさんの知り合いなんて始めてです！！」
なのはが無邪気にはしゃいでいる。
この世界では御伽噺や神話、アニメや漫画でしか存在しないと思われている
魔法使いに出会ったということが、よほど嬉しいのだろう。
「い、一応、あなたにも魔法の資質はありますよ……？」

「ふぇ？」

なのはのはしゃぎように若干引いていたフェレットだったが、なのはにも同様の力があることを説明する。

「僕の声―念話が聞こえたということは、間違いなく……」

「え、え、え～～～～～～！？」

フェレットの言葉に驚くなのは。

「だから、『あなた方』に力を貸してほしいと頼んだんです」

「き、急にそんなこと言われても……」

いきなり自分に魔法の力があると言われ、戸惑うなのは。

「お願いします！　お礼は必ずしますから！！」

「お、お礼とか、そういうのはいいんだけど……」

「おい、お前ら」

なのはとフェレットが言葉を交わしていると、不意に銀二が口を挟んだ。

「そろそろアイツが動き出すぞ」

銀二の視線の先に、一人と一匹も目を向ける。

そこには徐々にではあったが、巨体を動かそうとしている怪物―思

念体の姿があった。
それを見たフェレットはなのは達に向かって、
「と、とにかく！今は一刻も早くアイツを止めないと！
えぇっと…、銀二さん？　アイツに封印魔法をお願いします！」
「は？　ふういんまほう？？　なんだそりゃ？」
「え？」
一瞬場の時間が止まった。
「も、もしかして封印魔法は使えないんですか？」
フェレットが恐る恐る銀二に尋ねる。
「使えないも何も、俺が使えるのはコレだけだぜ？」
そういって銀二は自分の二の腕を叩く仕草をする。
恐らく身体強化のことを差しているのだろう。
「そ、そんな……」
フェレットはガクッと肩を落とし、落胆の様子を見せる。
まさかの事態。あれほどの身体強化魔法を使いこなす人間なら、
かなり高ランクの魔導師であろうと踏んでいたのだが、見込みが甘
かった。
まさか一つの魔法しか使えないとは。しかもよりにもよって身体強
化ときた。
物理的なダメージだけではアイツは止められない。いや、倒すこと

はできる。
ここら一帯を更地に出来るほどの物理的衝撃を加えることが出来るならば……。
しかしそれは無理からぬことだ。
そこまで考えたフェレットはもう一人のほうを見る。
「やっぱり、あなたの協力が必要です！」
「え？わたし？？」
再びフェレットに話を振られて慌てるなのは。
「これを……、僕の魔法の力を、あなたに託します」
そう言って、フェレットは自分の首にかけてあった、紅い宝石のようなものを差し出す。
「そ、そんなこと言われても……。ど、どうすればいいの？」
なのはは未だ困惑している様子だったが、一応覚悟は決めたようだった。
「僕の言葉の後に続いてください」
「わ、わかった……」
「おめーら、どうやらのんびり駄弁ってる暇はねぇみてぇだぞ」
なのはとフェレットが何か始めようとしていたが、状況は既に切迫しているようだ。

見れば思念体は既に身体を起こし、紅い眼をぎらつかせて、戦闘態勢に入っている。

「すみません、銀二さん。少しの間だけ時間を稼いでいただけませんか？」

「ああ？　面倒くせぇなぁ……」

銀二が心底ダルそうに答える。

「銀二さん……」

なのはのほうは不安そうな瞳で銀二を見上げている。
それを見た銀二は顔をしかめながら、ため息をつき…、

「ちっ、しゃあねぇな。乗りかかった船だ。最後まで面倒見てやらぁ」

――不機嫌そうな声で、時間稼ぎを引き受けた――

第１０話

（骨格……密度強化。神経……伝達速度強化。
筋肉……耐久度強化。血管……外壁強化。皮膚……硬度強化。
その他内臓器官……性能強化。全工程、完了）

銀二は神経を研ぎ澄まし、己の体内に存在する魔力をコントロールし、
身体の細部に行き渡らせる。
それは激しく流れる川の水を、無数の細い管の中に通すような作業。
繊細な外科手術のようなそれを、銀二は数度の呼吸の内に終わらせる。
あまりにも慣れ親しんだその作業は、銀二にとって息をするにも等しい行為だった。

「さて、やるか」

そういって銀二は目の前の異形の怪物―ジュエルシードの思念体を見据える。
どうやらあちらの準備も万端のようだ。
先程やられたのが、よほど悔しいのだろうか。
思念体は殺意の篭った紅い視線を銀二に向けている。

「おうおう、いっちょまえにガンたれてやがる」

だが銀二は、そんな視線もどこ吹く風、とばかりに不敵な笑みを浮かべ、
思念体を睨み付けている。
そんな銀二の態度が気に食わなかったのか、思念体はブルブルと身

体を震わせ、
銀二に向かって飛び掛ってくる。

「上等！！」

銀二も己の拳に魔力を集中させ、思念体に向けて突き出す。
拳から溢れた銀色の魔力光が、銀二の腕を包んでいる。
そして、銀二の銀拳と思念体の巨体が衝突した。

二つの力がぶつかった衝撃の余波によって、周りの空気を振るわせる。
一瞬、互角に見えた勝負だったが、先に悲鳴をあげたのは、銀二の拳より、
遥かに巨大な思念体のほうだった。
自分の意思とは全く逆の方向へ跳ね飛ばされていく思念体。
純粋な力と力のぶつかり合いを制したのは銀二だった。
思念体は身体の一部を辺りに撒き散らしながら、後方へと転がっていく。

「どうした？　これで終わりか？」

銀二のそんな言葉に反応したのか、思念体は転倒しながらも体勢を立て直す。
そして、再度特攻をかけようと身体を震わせる。

「そうこなくっちゃな」

銀二は口の端を吊り上げ、獰猛な笑みを浮かべて、思念体を睨み付ける。
そして今度はこちらから仕掛けてやろうと考え、踏み込もうとした

ときだった。

「レイジングハート！セーットアーーップ！！」

なのはの声と、凄まじい力の波動を背後に感じた。
振り返ってみると、桃色の奔流が天を貫いていた。

「な、何だありゃ？？」

銀二は驚愕していた。
魔力探知能力の低い銀二であったが、そんな自分にも解るほど、
強大な魔力の発露。
人は見かけによらないってのは本当だったんだな、と銀二は思った。

しばらくして、桃色の奔流が消えると、中からなのはが現れた。
先程の服装とはガラリと変わって、白を基調とした衣装に、
紅い宝石に金の装飾を施した杖のようなものを持っている。
自分の姿に驚いているようで、しきりに「なにこれ～！？」と言い
ながら、
自分の衣装の裾を摘んだりしている。
見ればフェレットのほうも呆然としていた。
おそらく、なのはの魔力量に驚いているのだろう。
銀二も大分驚いていたが、まずは思念体を無力化するのが先だと思
い、
再び思念体へと視線を向けた。
すると思念体の様子が先程と少し違うことに気付く。
思念体の眼は銀二を捉えておらず、その背後―なのはを見ていた。

不味い、と銀二が思った瞬間、思念体が銀二を飛び越えてなのはに
襲い掛かる。

それは思念体の本能といえるものだろうか。
思念体は今、確実に銀二ではなく、なのはのほうが脅威だと判断している。
なのはの魔力に一瞬呆けた自分を叱責しながら、銀二はなのはの元に駆け出した。
常人を遥かに凌駕する銀二の速さであったが、その遅れは決定的だった。
思念体は既になのはの目前に迫っていた。

＜Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ＞

しかし、思念体の攻撃がなのはに届くことはなかった。
なのはの持つ杖から声が発せられると同時に、なのはの前方に薄い桃色の壁のようなものが発生し、思念体の巨体を受け止める。
そしてそのまま思念体の身体を弾き飛ばした。
弾き飛ばされた思念体は再び銀二の方へ迫ってくる。

「おわっ！？」

そのことに若干慌てる銀二であったが、長年の経験からか、身体が勝手に動いた。
片足を天に突き出し、そのまま振り下ろす。
テコンドーでいうところの『ネリチャギ』、つまり『かかと落とし』を
思念体の身体に食らわせる。
そしてそのまま思念体は地面へと叩きつけられ、動かなくなった。

「いまだ！　封印を！！」

フェレットがそう言うと、なのはの持つ杖が、その形状を変化させ

る。

＜Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ＞

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル？？？、封印！！」

なのはの声とともに、杖から無数の桃色の帯が放たれ、思念体を拘束する。

そして、そのまま思念体が光に包まれる。

光が収まると、既にそこには異形の姿はなく、青白く発光した小さな石だけが存在した。

「その杖の先で、その石に触れて」

「う、うん」

フェレットに促され、なのはが杖の先で石に触れると、杖の先に付いていた紅い宝石に石が吸い込まれる。

「ふぅ……、こ、これで終わりなの？」

「はい。ジュエルシードは無事に封印できました」

すると、なのはの衣装がもとの服へと戻っていく。

先程の杖も紅い宝石に戻り、なのはの手の中へ。

「よお、お疲れさん」

銀二がなのはへ労いの言葉をかける。

「あ、銀二さん！　にゃはは、ありがとうございます。
銀二さんのお陰ですよ」

「別に俺は大したことはしてねーよ……」

「そんなことありません！銀二さんがいなかったら私……」

二人がそんな言葉を交わしていると、遠くからサイレンの音が聞こえてくる。
二人は顔を見合わせ、

「も、もしかして私達、このままここにいると……」

二人で辺りを見渡す。
そこには砕けた塀やアスファルトの地面が……。

「まぁ、間違いなく、大変なことになるな……」

そこからの行動は早かった。
その場から脱兎の如く走り去る二人と一匹。

「ご、ごめんなさ〜〜〜い！！」

そんな少女の声の残響だけがその場に残っていた。

第１０話（後書き）

やっとアニメ第1話分が終わった……。

銀二「まったく……、どんだけかかってんだよ」

ほんとにねー。このままいくと、無印だけで１２０話いっちゃうよね。

銀二「長過ぎだろ！？　もうちょいスピーディにいけよ！」

わかったわかった。じゃあ次話からゆりかご戦始めるわ。

銀二「すっとばし過ぎだ！！　Ａ' ｓ抜いてＳｔＳまで行ってんだろそれ！？」

わがままだなー、うちの主人公様は。

銀二「わがままとか、そういう問題じゃねぇぇぇ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0398o/

魔法少女リリカルなのは～銀拳の魔導師～

2010年11月2日13時57分発行